

あそび

森鷗外

青空文庫

木村は官吏である。

ある日いつもの通りに、午前六時に目を醒さました。夏の初めである。もう外は明るくなっているが、女中が遠慮してこの間まだけは雨戸を開けずに置く。蚊かやの外に小さく燃えているランプの光で、独ひとりね寝ねやの闇が寂しく見えている。

器械的に手が枕まくらの側そばを探る。それは時計を捜すのである。逡信省で車掌に買って渡す時計だとかで、頗すこぶる大きいニツケル時計なのである。針はいつもの通り、きちんと六時を指している。

「おい。戸を開けんか。」

女中が手を拭ふき拭ふき出て来て、雨戸を繰り開ける。外は相変ら

ず、灰色の空から細かい雨が降っている。暑くはないが、じめじめとした空気が顔に当る。

女中は湯帷子ゆかたに褌たすきを肉に食い入るように掛けて、戸を一枚一枚戸袋に繰り入れている。額には汗がにじんで、それに乱れた髪の毛がこびり附いている。

「ははあ、きょうも運動すると暑くなる日だな」と思う。木村の借家から電車の停留場まで七八町ある。それを歩いて行くと、涼しいと思つて門口を出ても、行き着くまでに汗になる。その事を思つたのである。

縁側に出て顔を洗いながら、今朝急いで課長に出すはずの書類のあることを思い出す。しかし課長の出るのは八時三十分頃だか

ら、八時までには役所へ行けば好いと思う。

そして頗る愉快げな、晴々とした顔をして、陰気な灰色の空を眺めている。木村を知らないものが見たら、何が面白くてあんな顔をしているかと怪むことだろう。

顔を洗いに出ている間に、女中が手早く蚊ををたたんで床を上げていいる。そこを通り抜けて、唐紙を開けると、居間である。

机が二つ九十度の角を形づくるように据えて、その前に座布団が鋪しいてある。そこへ据わつて、マッチを擦つて、朝日を一本飲む。

木村は為事しごとをするのに、差当りしなくてはならない事と、暇のある度にする事とを別けている。一つの机の上を綺麗に空虚にし

て置いて、その上へその折々の急ぐ為事を持つて行く。そしてその急ぐ為事が片付くと、すぐに今一つの机の上に載せてある物をそのあとへ持ち出す。この載せてある物はいつも多い。堆く積んである。それは緩急によつてかさ重ねて、比較的急ぐものを上にして置くのである。

木村は座布団の側にある日出新聞を取り上げて、空虚にしてあ
る机の上に広げて、七面の処ひのでを開ける。文芸欄のある処である。
朝日の灰の翻こぼれるのを、机の向うへ吹き落しながら読む。顔は
やはり晴々としている。

唐紙のあつちからは、はたきと箒ほうきとの音が劇はげしく聞える。女中
が急いで寝間を掃除しているのである。はたきの音が殊に劇しい

ので、木村は度々小言を言ったが、一日位直つても、また元の通りになる。はたきに附けてある紙ではたかずに、柄の先きではたくのである。木村はこれを「本能的掃除」と名づけた。鳩の卵を抱いているとき、卵と白墨の角を剗したのと取り換えて置くと、やはりその白墨を抱いている。目的は余所になつて、手段だけが実行せられる。塵を取るためとは思わずに、はたかためにはたかのである。

尤もこの女中は、本能的掃除をしても、「舌の戦ぎ」をしても、活潑で間に合うので、木村は満足している。舌の戦ぎというのは、ロオマンチック時代のある小説家の云つた事で、女中が主人の出した迹で、近所をしゃべり廻るのを謂うのである。

木村は何か読んでしまつて、一寸顔を蹙めた。大抵いつも新聞を置くときは、極^{ごく} apathique 《アパチック》な表情をするか、

そうでなければ、顔を蹙めるのである。書いてあるのは毒にも薬にもならないような事であるか、そうでなければ、木村が不公平だと感ずるような事であるからである。そんなら読まなくても好きさそうなものであるが、やはり読む。読んで気のない顔をしたり、一寸顔を蹙めたりして、すぐにまた晴々とした顔に戻るのである。

木村は文学者である。

役所では人の手間取のような、精神のないような、附けたりのような為事をしていて、もう頭が禿^はげ掛かつて、まだ一向幅が利かないのだが、文学者としては多少人に知られている。ろくな

物も書いていないのに、人に知られている。畜ただに知られているばかりではない。一旦いったん人に知られてから、役の方が地方勤めになつたり何かして、死んだもののようにせられて、頭が禿げ掛かつた後に東京へ戻されて、文学者として復活している。手数てすうの掛かつた履歴である。

木村が文芸欄を読んで不公平を感じるのが、自利的であつて、毀そしられれば腹を立て、褒められれば喜ぶのだと云つたら、それは冤えんざい罪だろう。我が事、人の事と言わず、くだらない物が讃ほめてあつたり、面白い物がけなしてあつたりするのを見て、不公平を感ずるのである。勿論もちろん自分が引合に出されている時には、一層切実に感ずるには違ちがない。

ルウズウエルトは「不公平と見たら、戦え」と世界中を説法して歩いている。木村はなぜ戦わないだろうか。実は木村も前半生では盛んに戦ったのである。しかしその頃から役人をしているので、議論をすれば著作が出来なかつた。復活してからは、下手ながらに著作をしているので、議論なんぞは出来ないのである。

その日の文芸欄にはこんな事が書いてあつた。

「文芸には情調というものがある。情調は situation 《シチュアーション》の上に成り立つ。しかし [inde'finissable] 《アンデファイニツサブル》なものである。木村の関係している雑誌に出ている作品には、どれにも情調がない。木村自己のものにも情調がないようである。」

約つづめて言えばこれだけである。そして反対に情調のある文芸というものが例で示してあつたが、それが一々木村の感服しているものでなかつた。中には木村が、立派な作者があんな物を書かなければ好いいと思つたものなんぞが挙げてあつた。

一体書いてある事が、木村には善くは分らない。シチュアシヨンの上に成り立つ情調なんぞと云う詞ことばを読んでも、何物をもはつきり考えることが出来ない。木村は随分哲学の本も、芸術を論じた本も読んでいるが、こんな詞ことばを読んでは、何物をもはつきり考えることが出来ない。いかにも文芸には、アンデフィニツサアブルだとも云えば云われそうな、面白い処があるだろう。それは考えられる。しかしシチュアシヨンとはなんだろう。昔からドラ

アムやなんぞで、人物を時と所とに配り附けた上に出来るもの
言うではないか。ヘルマン・バルが旧い文芸の靦ねらい処としてい
る、急劇で、豊富で、変化のある行為の緊張なんというものと、
差別はないではないか。そんなものの上に限って成り立つとい
うのが、木村には分からないのである。

木村はさ程自信の強い男でもないが、その分からないのを、自
分の頭の悪いせいだとは思わなかった。実は反対に記者のために
頗すこぶる気の毒な、失敬な事を考えた。情調のある作品として挙げて
ある例を見て、一層失敬な事を考えた。

木村の蹙めた顔はすぐに晴々としてしまった。そして一人者の
なんでも整頓せいとんする癖で、新聞を丁寧に畳んで、居間の縁側の隅

に出して置いた。こうして置けば、女中がランプの掃除に使つて、余つて不用になると、屑屋くずやに売るのである。

これは長々とは書いたが、実際二三分間の出来事である。朝日を一本飲む間の出来事である。

朝日の吸すい殻がらを、灰皿に代用している石決明貝あわびがいに棄てると同時に、木村は何やら思い附いたという風で、独ひとり笑わらいをして、側の机に十冊ばかり積み上げてある manuscripts 《マニユスクライ》らしいものを一抱きに抱いて、それを用筆筒ようだんすの上に運んだ。

それは日出新聞社から頼まれている応募脚本であつた。

日出新聞社が懸賞で脚本を募つたとき、木村は選者になつた。

木村は息も衝つけない程用事を持つている。応募脚本を読んでいる

時間はない。そんな時間を^{こしら}拵えるとすれば、それは烟草休^{たばこやすみ}の暇をそれに使う外はない。

烟草休には誰も不愉快な事をしたくはない。応募脚本^{たれ}なんぞには、面白いと思つて読むようなものは、十読んで一つもあるかないかである。

それを讀もうと受け合つたのは、頼まれて不精^{ふしようぶしよう}々々に受け合つたのである。

木村は日出新聞の三面で、度々悪口を書かれている。いつでも「木村先生一派の風俗壊乱」という詞が使つてある。中にも西洋の誰やらの脚本^{きま}をある劇場で興行するのに、木村の訳本を使った時にこのお極^{きま}りの悪口が書いてあつた。それがどんな脚本かと云

うと、censure 《サンシユウル》の可笑おかしい程ほど厳こしいウイインやベルリンで、書籍としての発行を許しているばかりではない、舞台での興行を平気でさせている、頗る甘い脚本であつた。

しかしそれは三面記者の書いた事である。木村は新聞社の事情には※くらいが、新聞社の芸術上の意見が三面にまで行き渡つていないのを怪みはしない。

今読んだのはそれとは違う。文芸欄に、縦たとい令個人たといの署名はしてあつても、何のことわりがきもなしに載せてある説は、政治上の社説と同じようなもので、社の芸術観が出ているものと見て好よかろう。そこで木村の書くものにも情調がない、木村の選択あずかに与あつてゐる雑誌の作品にも情調がないと云うのは、木村に文芸が分か

らないと云うのである。文芸の分からないものに、なんで脚本を選ばせるのだらう。情調のない脚本が当選したら、どうするだらう。そんな事をして、応募した作者に済むか。作者にも済むまいが、こつちへも済むまいと、木村は思った。

木村は悪い意味でジレッツタントだと云われているだけに、そんな目に逢あつて、面白くもない物を読まないでも、生活していられる。兎とに角かくこの一山ひとやまを退治することは当分御免ごうむを蒙りたいと思つて、用筆筒の上へ移したのである。

書いたら長くなつたが、これは一秒時間の事である。

隣の間では、本能的掃除の音が歇やんで、唐紙が開いた。膳ぜんが出た。

木村は根芋の這入はいっている味噌汁みそしるで朝飯を食った。

食つてしまつて、茶を一杯飲むと、背中に汗がにじむ。やはり夏は夏だと、木村は思つた。

木村は洋服に着換えて、封を切らない朝日を一つ隠しに入れて玄関に出た。そこには弁当と蝙蝠傘ことうもりがさとが置いてある。杳くつも磨いてある。

木村は傘をさして、てくてく出掛けた。停留場までの道は狭い町家続きで、通る時に主人の挨拶あいさつをする店は大抵極まっている。そこは気を付けて通るのである。近所には木村に好意を表している、挨拶などをするものと、冷澹れいたんで知らない顔をしているものがある。敵対の感じを持つているものはないらしい。

そこで木村はその挨拶をする人は、どんな心持でいるだろうか
と推察して見る。先ず小説なぞを書くものは変人だとは確かに思
っている。変人と思うと同時に、気の毒な人だと感じて、「prot
eigei」《プロテジエエ》にしてくれるという風である。それが挨
拶をする表情に見えている。木村はそれを厭いやがりもしないが、無
論難ありがた有くも思っていない。

丁度近所の人の態度と同じで、木村という男は社交上にも余り
敵を持つてはいない。やはり少し馬鹿ばかにする気味で、好意を表し
ていてくれる人と、冷澹に構わずに置いてくれる人があるばか
りである。

それに文壇では折々退治られる。

木村はただ人が構わずに置いてくれれば好いと思う。構わずにというが、著作だけはさせて貰いたい。それを見当違に罵倒ばとうしたりなんかせずに置いてくれれば好いと思うのである。そして少数の人がどこかで読んで、自分と同じような感じをしてくれるものがあつたら、為合せしあわせだと、心のずっと奥の方で思っているのである。

停留場までの道を半分程歩いて来たとき、横町から小川という男が出た。同じ役所に勤めているので、三度に一度位は道みちづれ連になる。

「けさは少し早いと思つて出たら、君に逢つた」と、小川は云つて、傘を傾けて、並んで歩き出した。

「そうかね。」

「いつも君の方が先きへ出ているじゃあないか。何か考え込んで歩いていたね。大作の趣向を立てていたのだろう。」

木村はこう云う事を聞く度に、くすぐられるような心持がする。それでも例の晴々とした顔をして黙っている。

「こないだ太陽を見たら、君の役所での秩序的な生活と芸術的の生活とは矛盾していて、到底調和が出来ないと云ってあつたつけ。あれを見たかね。」

「見た。風俗を壊乱する芸術と官吏服務規則とは調和の出来ようがないと云うのだろう。」

「なるほど、風俗壊乱というような字があつたね。僕はそうは取

らなかつた。芸術と官吏というだけに解したのだ。政治なんぞは先ず現状のままでは一時の物で、芸術は永遠の物だ。政治は一国の物で、芸術は人類の物だ。」小川は省内での饒舌家じょうぜつかで、木村はいつもうるさく思っているが、そんな素振そぶりはしないように努めている。先方は持病の起つたように、調子附いて来た。「しかし、君、ルウズウエルトの方々で遣やつてゐる演説を讀んでいるだろうね。あの先生が口で言つてゐるように行けば、政治も一時だけの物ではない。一國ばかりの物ではない。あれを一層高尚にすれば、政治が大芸術になるねえ。君なんぞの理想と一致するだろうと思ふが、どうかねえ。」

木村は馬鹿々々しいと思つて、一寸ちよつと顔を蹙しかめたくなつたのを

こらえている。

そのうち停留場に来た。場末の常で、朝出て晩に帰れば、丁度満員の車にばかり乗るようになるのである。二人は赤い柱の下に、傘を並べて立っていて、車を二台も遣り過して、やつとの事で乗った。

二人共弔つりかわ皮かわにぶら下がった。小川はまだしやべり足りないらしい。

「君。僕の芸術観はどうだね。」

「僕はそんな事は考えない。」不精々々に木村が答えた。

「どう思つて遣つているのだね。」

「どうも思わない。作りたとき作る。まあ、食いたとき食う

ようなものだろう。」

「本能かね。」

「本能じゃあない。」

「なぜ。」

「意識して遣っている。」

「ふん」と云つて、小川は変な顔をして、なんと思つたか、それきり電車を降りるまで黙っていた。

小川に分かれて、木村は自分の部屋の前へ行つて、帽子掛に帽子を掛けて、傘を立てて置いた。まだ帽子は二つ三つしか掛かつていかなかった。

戸は開け放して、竹たけすだれ簾が垂れてある。お為しき着せの白服を着

た給仕の側を通つて、自分の机の処へ行く。先きへ出ているものも、まだ為事しごとには掛からずに、扇などを使つてゐる。「お早う」位を交換するのもある。黙つて頤あごで会釈するのもある。どの顔も蒼あおざめた、元氣のない顔である。それもそのはずである。一月に一度位ずつ病氣をしないものはない。それをしないのは木村だけである。

木村は「非常持出」と書いた札の張つてある、煤すす色いろによごれた戸棚から、しめつぽい書類を出して来て、机の上へ二山に積んだ。低い方の山は、其日々に処理して行くもので、その一番上に舌を出したように、赤札の張つてある一ひとつづつ綴ひの書類がある。これが今朝課長に出さなくてはならない、急ぎの事件である。高

い方の山は、相間あいま々々にぼつぼつ遣れば好い為事である。当り前の分担事務の外に、字句の訂正を要するために、余所よその局からも、木村の処へ来る書類がある。そんなのも急ぎでないのはこの中に這入っている。

書類を持ち出して置いて、椅子いすに掛けて、木村は例の車掌の時計を出して見た。まだ八時までに十分ある。課長の出勤するまでには四十分あるのである。

木村は高い山の一番上の書類を広げて、読んで見ては、小さい紙切れに糊のり板いたの上の糊を附けて張つて、それに何やら書き入れている。紙切れは幾枚かを紙撚こよりで繫つないで、机の横側に掛けてあるのである。役所ではこれを附箋と云っている。

木村はゆっくり構えて、絶えずこつこつと為事をしている。その間顔は始終晴々としている。こういう時の木村の心持は一寸説明しにくい。この男は何をするにも子供の遊んでいるような気になつてしている。同じ「遊び」にも面白いのもあれば、詰まらないのものもある。こんな為事はその詰まらない遊びのように思つている分である。役所の為事は笑談じょうだんではない。政府の大機関の小齒輪となつて、自分も廻転しているのだということは、はつきり自覚している。自覚していて、それを遣つている心持が遊びのようなのである。顔の晴々としているのは、この心持が現れているのである。

為事が一つ片附くと、朝日を一本飲む。こんな時は木村の空想

も悪戯いたずらをし出す事がある。分業というものも、貧乏籤くじを引いたもののためには、随分詰まらない事になるものだなどとも思う。しかし不平は感じない。そんならと云つて、これが自分の運だと諦あきらめているという fataliste 《フアタリスト》らしい思想を持つているのでもない。どうかすると、こんな事は罷やめたらどうだろうなどとも思う。それから罷めた先きを考えて見る。今の身の上で、ランプの下で著作をするように、朝から晩まで著作をすることになつたとして見る。この男は著作をするときも、子供が好きな遊びをするような心持になつている。それは苦しい処がないという意味ではない。どんな sport 《スポオト》をしたつて、障しょうがい礙がいを凌しのぐことはある。また芸術が笑談でないことを知らないのでも

ない。自分が手に持つている道具も、真の鉅匠きよしやう 大家の手に渡れば、世界を動かす作品をも造り出すものだとは自覚している。自覚していながら、遊びの心持になつていのである。ガンベツタの兵が、あるとき突撃をし掛けて鋒ほこしが鈍つた。ガンベツタが喇叭つばを吹くと云つた。そしたら進撃の譜ふは吹かないで、[revell]

《レウエイユ》の譜を吹いた。イタリア人は生死の境に立つていても、遊びの心持がある。兎に角木村のためには何をすることも遊びである。そこで同じ遊びなら、好きな、面白い遊びの方が、詰まらない遊びより好いには違いない。しかしそれも朝から晩までしていたら、単調になつて厭あきるだろう。今の詰まらない為事にも、この単調を破るだけの機能はあるのである。

この為事を罷めたあとで、著作生活の単調を破るにはどうしよう。それは社交もある。旅もある。しかしそれには金がいる。人の魚を釣るのを見ているような態度で、交際社会に臨みたくはない。ゴルキイのような *vagabondage* 《ワガボンダージュ》をして愉快を感じるには、ロシア人のような遺伝でもなくては駄目らしい。やはりけちな役人の方が好いかも知れないと思つて見る。そしてそう思うのが、別に絶望のような苦しい感じを伴うわけでもないのである。

ある時は空想がいよいよ放縦になつて、戦争なんぞの夢も見る。喇叭は進撃の譜を奏する。高く撃^かげた旗を望んで駈歩をするのは、さぞ爽^{そうかい}快だろうと思つて見る。木村は病氣というものをしたこ

とがないが、小男で痩せているので、徴兵に取られなかつた。それで戦争に行つたことはない。しかし人の話に、壮烈な進撃とは云つても、実は土囊どのおうを翳かざして匍匐ほふくして行くこともあると聞いているのを思い出す。そして多少の興味を殺そがれる。自分だつてその境に身を置いたら、土囊を翳して匍匐することは辞せない。しかし壮烈だとか、爽快だとかいう想像は薄らぐ。それから縦たとい戦争に行くことが出来ても、輜しちよう重じゆうに編入せられて、運搬をさせられるかも知れないと思つて見る。自分だつて車の前に立たせられたら、挽ひきもしよう。後に立たせられたら、推おしもしよう。しかし壮烈や爽快とは一層縁遠くなると思うのである。

ある時は航海の夢も見る。屋の如き浪を凌しのいで、大洋を渡つた

ら、愉快だろう。地極の氷の上に国旗を立てるのも、愉快だろうと思つて見る。しかしそれにもやはり分業があつて、蒸汽機関の火を焚たかせられるかも知れないと思うと、enthousiasme 《アンツウジアスム》の夢が醒めてしまふ。

木村は為事が一つ片附いたので、その一括の書類を机の向うに押し遣つて、高い山からまた一括の書類を卸した。初のは半紙けいしの罨紙けいしであつたが、こん度むらさきばんのは紫板むらさきばんの西洋紙である。手の平にべたりと食つ附く。丁度物ものほしざお干竿ものほしざおと一しよに蛞蝓なめくじを掴つかんだような心持である。

この時まで五六人の同僚が次第に出て来て、いつか机が皆塞ふさががつていた。八時の鐸たくが鳴つて暫くすると、課長が出た。

木村は課長がまだ腰を掛けないうちに、赤札の附いた書類を持って行つて、少し隔たつた処に立つて、課長のゆつくり書類を *ortefeuille* 《ポルトフォイユ》 から出して、硯箱すずりばこの蓋ふたを取つて、墨を磨するのを見ている。墨を磨つてしまつて、偶然のようにこつちへ向く。木村よりは三つ四つ歳の少い法学博士で、目附鼻しの緊しまつた、余地の少い、敏捷びんしょうらしい顔に、金縁の目金を掛けてゐる。

「昨日お命じの事件を」と云いさして、書類を出す。課長は受け取つて、ざつと読んで見て、「これで好い」と云つた。

木村は重荷を卸したような心持をして、自分の席に歸つた。一度出して通過しない書類は、なかなか二度目位で滞りなく通過す

るものではない。三度も四度も直させられる。そのうちには向うでも種々に考えて見るので、最初云つた事とは多少違つて来る。とうとう手が附けられなくなつてしまふ。それで一度で通過するのを喜ぶのである。

席に帰つて見ると、茶が来ている。八時に出勤したとき一杯と、午後勤務のあるときは三時頃に一杯とは、黙つていても、給仕が持つて来てくれる。色が附いているだけで、味のない茶である。飲んでしまふと、茶碗の底に滓かすが沢山淀よどんでいる。木村は茶を飲んでしまふと、相変らずゆつくり構えて、絶間なくこつこつと為し事ごとをする。低い方の山の書類の処理は、折々帳簿を出して照らし合せて見ることがあるばかりで、ぐんぐんはかが行く。三件も四

件も烟草休なしに済ましてしまふことがある。済んだのは、検印をして、給仕に持たせて、それぞれ廻す先へ廻す。書類中には直ぐに課長の処へ持つて行くのもある。

その間には新しい書類が廻つて来る。赤札のは直ぐに取り扱う。その外はどの山かの下へ入れる。電報は大抵赤札と同じようにするのである。

為事をしていゝうちに、急に暑くなつたので、ふいと向うの窓を見ると、朝から灰色の空の見えていた処に、紫掛かつた暗色の雲がまろがつて居る。

同僚の顔を見れば、皆ひどく疲れた容貌ようぼうをしていゝ。大抵下顎たあごが弛ゆるんで垂れて、顔が心持長くなつていゝのである。室内の

湿った空気が濃くなって、頭をお圧すように感ぜられる。今のよう
に特別に暑くなつた時でなくても、執務時間がやや進んでから、
便所に行った帰りに、廊下から這入ると、悪い烟草の匂においと汗の香
とでむ噎せるような心持がする。それでも冬になつて、だんろ煖炉を焚た
いて、戸を締め切っている時よりは、夏のこの頃はるが廻かにましであ
る。

木村は同僚の顔を見て、一寸顔をしか蹙めたが、すぐにまた晴々と
した顔になつて、為事に掛かつた。

暫くすると雷が鳴つて、大降りになつた。雨が窓にぶつ附かつ
て、恐ろしい音をさせる。部屋中のものが、皆為事を置いて、窓
の方を見る。木村の右隣の山田と云う男が云つた。

「むしむしすると思つたら、とうとう夕立が来ましたな。」

「そうですね」と云つて、晴々とした不断の顔を右へ向けた。

山田はその顔を見て、急に思い附いたらしい様子で、小声になつて云つた。

「君はぐんぐん為事をはかどを撈らせるが、どうもはたで見ていると、笑談にしているようでない。」

「そんな事はないよ」と、木村はてんぜん恬然として答えた。

木村が人にこんな事を言われるのは何遍だか知れない。この男の表情、言語、挙動は人にこういうことば詞を催促していると云つても好い。役所でも先代の課長は不真面目ふまじめな男だと云つて、ひどく嫌つた。文壇では批評家が真剣でないと云つて、けなしている。一

度妻を持って、不幸にして別れたが、平生何かの機会で衝突する度に、「あなたはわたしを茶かしてばかりいらつしやる」と云うのが、その細君の非難の主なるものであった。

木村の心持には真剣も木刀もないのであるが、あらゆる為事に対する「遊び」の心持が、ノラでない細君にも、人形にせられ、おもちゃにせられる不愉快を感じさせたのであろう。

木村のためには、この遊びの心持は「与えられたる事実」である。木村と往来しているある青年文士は、「どうも先生には現代人の大事な性質が闕かけています、それは [nervosite] 《ネルウオジテエ》です」と云った。しかし木村は格別それを不幸にも感じていないらしい。

夕立のあとはまた小降になつて余り涼しくもならない。

十一時半頃になると、遠い処に住まっているものだけが、弁当を食いに食堂へ立つ。木村は号砲ドンが鳴るまでは為事をしていて、それから一人で弁当を食うことにしている。

二三人の同僚が食堂へ立ったとき、電話のベルが鳴つた。給仕が往つて暫く聞いていたが、「少々お待ち下さい」と云つて置いて、木村の処へ来た。

「日出新聞社のものですが、一寸電話口へお出いで下さいと申すことです。」

木村が電話口に出た。

「もしもし。木村ですが、なんの御用ですか。」

「木村先生ですか。お呼立て申して済みません。あの応募脚本ですが、いつ頃御覧済になりましたでしょうか。」

「そうですねあ。此頃忙しくて、まだ急には見られませんよ。」
「さようですか。」なんと云おうかと、暫く考えているらしい。

「いずれまた伺います。何分宜しく。」

「さようなら。」

「さようなら。」

微笑の影が木村の顔を掠^{かす}めて過ぎた。そしてあの用筆筒の上から、当分脚本は降りないのだと、心の中で思った。昔の木村なら、「あれはもう見ない事にしました」なんぞと云つて、電話で喧嘩^{けんか}を買ったのである。今は大分おとなしくなっているが、彼れの微

笑の中には多少の Boshheit 《ボオスハイト》がある。しかしこんな、けちな悪意では、ニイチエ主義の現代人にもなられまい。

号砲^{ドン}が鳴った。皆が時計を出して巻く。木村も例の車掌の時計を出して巻く。同僚はもうとつくに書類を片付けていて、どやどや退出する。木村は給仕とただ二人になって、ゆっくり書類を戸棚にしまって、食堂へ行つて、ゆっくり弁当を食つて、それから汗臭い満員の電車に乗った。

(明治四十三年八月)

青空文庫情報

底本：「普請中 青年 森鷗外全集」ちくま文庫、筑摩書房
1995（平成7）年7月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房
1971（昭和46）年4月～9月刊

初出：「三田文學」

1910（明治43）年8月

2016年2月6日修正

入力：鈴木修一

校正：mayu

2001年6月19日公開

2012年11月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あそび

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>